

記憶がはっきりしている竹村先生のほうからどうぞ(笑)。

竹村 お言葉に甘えて憎越ながら私のほうから口火を切らせていただきます。と思います。二十一歳の頃、私はやはり中国古典の『莊子』や『老子』が好きで、小説のように読んでいたんです。その時に『易経』に触れる機会があったのですが、「難しい古いの本だなあ」というくらいで、それほど引きつけられませんでした。

ところが一年ほど後のことですが、『易経』の冒頭にある龍の話が占いととしての吉凶でなく、ものごとの過程として読めることに思いあたり、「これは」って思ったんです。

伊與田 「乾(けん)为天(てん)」の一節ですね。

竹村 はい。龍の動きが映像としてダイナミックに捉えられて、まるで自分がその中に入ってしまったかのような気持ちになりました。「これはおもしろい」と読み出したところが『易経』に引きつけられました。以来易経病になってしまいました(笑)。それからこれ三十六年です。

伊與田 独学で学んでこられたのですか。

竹村 独学というところはいいいんですが、学問というようなものではない



●対談——伊與田覺&竹村亞希子

いんです。想像力を働かせて何回も読んでいくうちに、シンプルな言葉に多様な意味合いがあることに気づきまして、膨らませたイメージと自分の体験と重ね合わせながら「あの時抱えていた問題の解決のポイントは何だったのか」というようなことを考えるようになりました。

飛躍的に理解が進んだのは、ある方の武道論を読んだ時でした。龍の成長過程が認識論や技術論に重なり合っ

心に響いてきました。

そうして、『易経』という書物にはありとあらゆることのヒントが書かれています。それが分かってきて、読むたびに発見と驚きがありました。その驚きの連続でここまで来てしまった感じですよ。

伊與田 しかし、『易経』を専らにやっておられるというのは大したことです。古典に親しまれたのは、ご両親の影響もあったのではありませんか。

竹村 父が玄米菜食の運動家で二木

論語普及会学監

伊與田覺

いよた・さとし 大正5年高知県生まれ。学生時代から安岡止齋氏に師事。昭和15年青少年の学業・有源舎発足。21年大平思想研究所を設立。28年大学生の精神道場有源学院を創立。32年関西師友協会設立に参予し理事・事務局長に就任。その教学道場として44年には財団法人成人教学研修所の設立に携わり、常務理事、所長に就任。62年論語普及会を設立し、学監として論語精神の培地に尽力する。著書に「人に長たる者の人間学」(2大学)を著述する。監督に『論語一日一言(いづれも致知出版社刊)』など。

謙三先生なども親しくしていたものです。ですから、書齋には自然食の本に交じって四書五経など古典もありました。そういうものを小さい頃から雑学的に読んでいたことも多少は影響しているのかもしれない。

——『易経』を筆写

研究に七百時間を費やす

竹村 伊與田先生の『易経』との出会いはどういいうものでしたか。

伊與田 そのことを話さなくては